

公表反対は誰の為（3）

次に、学力調査の結果を公表すると、成績の悪かった学校の子ども達は、「傷付いたり、劣等感を持ったりするのではないか」という事について考えてみます。

全国一斉の学力調査は年に1回ですが、学校の中では色々なテストを行っている筈で、テストの度に、出来が悪いからといって子ども達は、傷付いたり、劣等感を持ったりしているのでしょうか。勿論、そういう子もいないとはいいいませんが、多くは「自分は勉強しなかったので仕方ない」とか「頑張ったんだけど、残念」、中には「これじゃ、母ちゃんに叱られるな!」といった様な反応が多かろうと思います。

こうした中で、教師は、出来る子はもっと伸ばし、勉強の苦手な子には、学習に興味を持たせ、少しでも伸びる様に指導して行かなければなりません。その為には、まず、子ども達に自分の力をしっかりと認識させる事が必要です。

世の中はすべからず競争社会なのに、学校の中だけはあたかも競争がないかの様に擬制するのは、極めて大きな問題です。自分としては努力したつもりだけれど旨く行かない、つまり努力が報われない等というのは、現実の社会では日常茶飯です。それでも努力するのは、自分の中にやりたい事や目指すものがあり、努力する価値があると信じているからでしょう。

教師に求められているのは、子ども達に自分の今の力をしっかりと認識させ、その上で、更に確かな学力が身に付く様指導する事であり、現実を曖昧にして「みんな一緒」で済ます事ではない筈です。

教師の皆さんは、学力調査の結果を公表すると子ども達が「傷付いたり、劣等感を持ったりするのではないか」といいますが、教師の皆さんが一番心配しているのは、実は、「自分のクラスの成績が悪いと、自分の実践力が問われてしまう」という事なのではありませんか。「結果を隠せば、自分の実践力も問われなくて済むと考えている教師がいるかも知れない」、これこそ私が一番危惧しているところです。

札幌市内の中学校の校長は「先生たちを脅かしても学力は簡単に上がらず、子ども達が傷付くだけだ」と述べています（11月30日付北海道新聞から）。

確かに、順位付けをし、競争を煽ったからといって子ども達の学力が上がるとは、私も単純に思っている訳ではありませんが、学校には、子ども達に確かな学力を保

障する責任があると思っています。四則計算も満足に出来ない状況で中学校に心太の様に押し出して、そんな事で一体誰が、小学校は責任を果たしていると評価するのでしょうか。

精神科医の和田秀樹氏は氏の著「スクールカーストの闇」の中で、子ども同士の競争や順位付けに関して次のように述べています。

「子ども同士の競争を否定しては、個々の課題や目的を強く意識させることはできない。勉強やスポーツなど、目的の明確な『作業』では、自分と他人とを比較できないからだ。そんな学校のクラス内で、子ども達は自分のポジションを掴むことが出来ず、不安でたまらない。何かで他人と比較しないと『自信』を保つことが出来なくなる。」

「個々のアイデンティティを奪われた子供たちは、集団心理に支配される以外、進む道がなかったのだ。そういう側面を考慮せず、『順位をつけると下位の子供が可哀そうだ』という大人の勝手な思い込みだけで競争を否定した結果、スクールカーストという名の『人気の序列』をうんだ。」

和田氏のこうした考えに対しては、批判的な人もいると思います。しかし私は、実社会に入れば様々な分野で競争に晒され、それによって差がつけられている現実がある以上、そこに目を塞ぐべきではありません。学校だけは競争の埒外に置こうというのは無理な話だし、それは決して子ども達の為にはならないと思います。

勿論、子どもの評価は勉強が全てでない事は、これ迄も幾度となく繰り返し申し上げて来ました。

勉強は出来なくても走らせたなら1番とか、絵を描かせたら大人顔負けという子もいて良いでしょう。多様な力を認め、伸ばしてこそその教育だと思います。ただ、国語や算数（数学）は、生きる力、そして確かな学力の骨格をなすものであり、そこは全ての子ども達にしっかりと身に付けさせるべきです。学校も教師もその事の重要性を十分認識して、全力で取り組んで欲しいという事を、私は常に申し上げているのです。（塾頭：吉田 洋一）